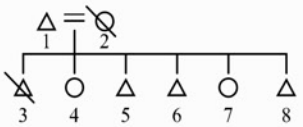
みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# Life World of Kampung Durian Tawar : Hierarchy and Household among the Orang Asli, Malaysia



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 信田, 敏宏<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00004003 |

No.26　　男 2 名女 1 名＝ 3 名



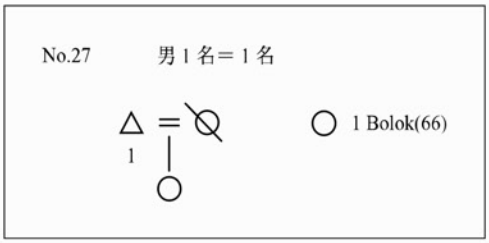

○ 1 Poteh(63)
○ 2 Besah: 1991 年死亡
○ 3 Ayong: 1982 年死亡、妻 Todi は Awas(No.61) と再婚
○ 4 Derak(34)
○ 5 Kana: No.38
○ 6 Yap: No.44
○ 7 Kedui(21): Hasim(No.25) の養父の養女に
○ 8 Resi(18)

No. 26

ポテー（Poteh）は Panglima Kecil の称号保有者である。非常事態宣言期には，連邦軍側の兵士として闘ったことがある。また，バティン・ジャングットと同様に「助産師（*bidan*）」でもある。1991 年に妻を亡くして以来，娘ドゥラッ（Derak）と息子ルスィ（Resi）と生活している。村にいる間は，ゴム採液業で生計をたてているが，工事現場やゴルフ・リゾートの掃除の仕事など村の外で現金収入が得られる仕事があると，すでに老年の身ながら若者たちに混じって出かける。ゴム採液業や換金作物栽培のような計画性のある生業というよりも，その時々の状況に応じて生業を転換していく生業のやり方である。体力があり多少とも無理が利く若者が行なうのであれば自然なことだが，ポテーのような世代の者がそのような不安定な生業形態をとっているのはドリアン・タワール村では奇異に見える。彼らの息子であるカナ（Kana）やヤップ（Yap），ルスィなども父ポテーの生業形態を模倣しているのか，同様の方法で生計をたてる傾向にある。彼らにとっては，ゴム採液業というのは積極的な収入源というよりも，「仕事」が得られなかった時に現金を得るための「保険」的な生業にすぎない。ポテーやルスィがゴルフ・リゾートの清掃の仕事で村を離れている時，ドゥラッが 1 人でゴム採液作業を行なっていた。

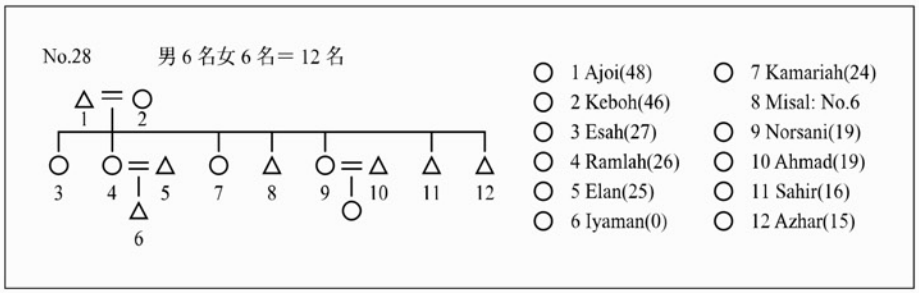
こうした生業のあり方は，バティン・ジャングットなどが理想とするゴム採液業やドリアン収穫を中心にした定住型の農業開発とは，その指向性を異にしている。ポテーの父親カリムはバティン・ジャングットやジェナン・ミサイの母インタンやムントゥリ・レワットのキョウダイであり，ポテーとバティン・ジャングットとはイトコ関係にある近しい親族だが，両者の生業形態にはかなりの違いが見られる。

「その後」，ポテーはキリスト教へ改宗して，村のキリスト教改宗者たちのリーダーとなった。




No. 27

ボロッ（Bolok）はポテーの実兄である。「耳が遠い（*pekak*）」。世帯調査当時，トウガラシ（*lada*）の栽培を細々としていて，ドリアン収穫による収入も少なかった。ゴム採液作業はしていなかった。ルンバウ（Rembau）に婚出していたが，妻が亡くなってから，村に帰ってきていた。娘は妻の村に住んでいる。プルタンの保健所に自転車で無料の薬をもらいに行くのを日課にしていた。生活に困っているのを見かねた村びとが，ときどき彼に現金を与えていた。食事はポテーの家で食べたり，アジョイの家で食べたりしていた。



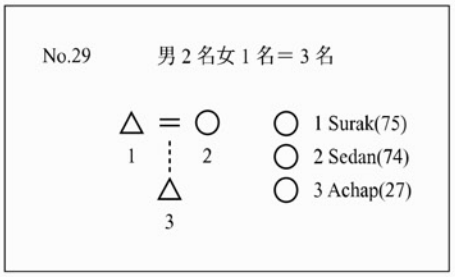

No. 28

アジョイと妻クボー（Keboh）とはイトコどうしである。アジョイは No. 10 のムンタッの息子で，クボーは No. 29 のスラッ（Surak）の娘である。アジョイ夫婦の息子ミサルは No. 6 のハドと結婚しているが，ハドとアジョイは同一母系出自集団の成員である。結果的に，二つの集団の間で交換婚が行なわれたことになった。アジョイは結婚時に Panglima Kecil の称号を与えられた。

アジョイはティカッ派である。30% くらいのコミッションを支払ってティカッのゴム園で採液作業している。このように，ティカッとの間に経済的なパトロン・クライアント関係がある。

世帯調査当時，クボーの父スラッは健在であったが，彼がかつて開拓したドリアン果樹園のために，アジョイの家のドリアン収入は村で上位に位置していた。その理由として，妻方のドリアン果樹園に，アジョイの持つ（親から受け継いだものも含めて）ドリアン果樹園が加わっていることが挙げられる。子供たちも多く，大家族である。既婚した娘たちの世帯の収入は普通であるが，娘たちの世帯は独立していないので，それぞれを合計してアジョイの世帯として集計するとゴムやドリアンの収入は必然的に多くなった。娘たちの夫たちはスランゴール州の同じ村の出身である。

娘が少し「狂気の状態（*gila*）」になったのは，バティン・ジャングットによって仕掛けられた邪術のせいだとティカッが噂を流したことがある。




No. 29

スラッ（Surak）はポテーらの兄であり，アジョイの妻クボーの父である。かつては，Panglima Tuha の称号を保有していた。「ビラッ（*bilak*：罠の一種）」の仕掛けを作っている時に，左腕に怪我をしたため左手が曲がっていた。妻スダン（Sedan）はかつてバティン・ドゥラマンの妻であったが，バティン・ドゥラマンの亡き後，スラッのイトコと再婚した。その後，スラッと再婚した。彼らの結婚は，スンバンの事例としてバハロン（Baharon 1973）が取りあげている。スダンは No. 15 のモイェムのイナッ（*inak*：母方のオバ）にあたる。また No. 53 のエンタッ（Entak）は，実の娘である。彼女たちの関係をたどってみると，バティン・ドゥラマンとバティン・ジャングットの間に姻族関係が認められる（図 12 参照）。

エンタッ夫婦（No. 53）の息子アチャップ（Achap）が養子になっていた。スダンからすれば，孫である。養子の理由は，スラッの息子がエンタッの夫サキット（Sakit）に連れられて森に出かけた際に，行方不明になった事件にあった。サキットはスラッの息子が行方不明になったので，そのことの詫びと「賠償（*ganti rugi*）」として，自分の息子であるアチャップをスラッの養子にしたのである。

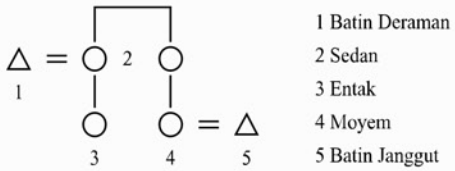


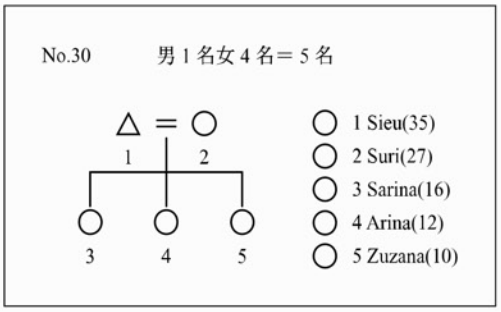

**図 12**　バティン・ドゥラマンとバティン・ジャングットの姻族関係

No. 30 の娘スリ（Suri）はイスラームへ改宗した。孫娘の 1 人も両親に従いイスラームへ改宗したが，残る 2 人の孫娘は改宗せずスラッの家に住んでいた。ドリアン果樹園の一部はスリに与えていたが，イスラーム改宗を理由にとりあげた。改宗しなかった 2 人の孫娘がドリアン収穫時に働いていた。

ゴム採液作業はアチャップが行なうのみであったが，彼は自分の稼ぎのほとんどを酒代などに使ってしまっていた。世帯調査当時，スラッは 75 歳の老齢にもかかわらず日雇い労働を行なっていた。そのほかの収入源は，ドリアン収穫時の収入のみであった。生活はかなり困窮しているようであった。1998 年 4 月にブキット・パヨン村（Kg. Bukit Payong）の女性と結婚してから，アチャップは真面目に働くようになった。アチャップはかつてイスラーム改宗を決意して直前で取りやめたことがあった。娘スリ夫婦は生活の困窮からイスラームへ改宗した。

ドリアンの季節，華人の仲買人から「イスラームに改宗すれば楽なのに」とからかわれ，「俺ら『異教徒／無宗教者（*kafir*）』はイスラーム（マレー人）には（本当の意味では）なれない」と言ったスラッの発言は印象的である。彼は豚肉などイスラームで禁止されている食物を食べているオラン・アスリ，しかも貧困に窮しているオラン・アスリがマレー人（ムスリム）になれるわけがないと言っていたのである。それは，名ばかりでもムスリムになり，施しを受けている娘夫婦に対する強烈な批判でもあった。

「その後」，スラッは亡くなり，ほどなくして，妻のスダンも亡くなった。アチャップは，妻の村に移住した。キリスト教へ改宗したという噂を聞いた。ブキット・パヨン村はキリスト教徒（カトリック）が多い村として知られている。




No. 30

スィウ（Sieu）は 1997 年 3 月にイスラームへ改宗した。妻スリがスィウに先だってイスラームへ改宗した。スラッ夫婦と同居していたが，イスラーム改宗に先立って得た最貧民用の家屋プロジェクトの援助を受けてから，新居に移った。末娘ズザナ（Zuzana）のみがイスラームへ改宗しており，そのほかの 2 人の娘は改宗を拒否し，食事を一緒にとれないなどの理由もありスラッの家に住んでいた。

ゴム採液作業をほとんど行なわず，村の外での日雇い労働を行なっていたが，イスラーム改宗後は，日雇い労働でさえもほとんど行なわなくなった。宗教局からの援助で生活していた。

スィウはティカッ派である。イスラーム改宗後，村の集まりにほとんど顔を出すことはなくなる。困窮生活からの脱却をはかって，軽い気持ちでイスラームに改宗したのであろうが，思わぬ反発を招いて本人も困惑しているといった状況であった。スリは自分の意志で改宗したのであろうが，それに引き続いて改宗したスィウにはムスリムとしての自覚はないようであった。以前と変わらぬ生活を続けて，それが逆に反発を招く原因になっていた。援助金がなくなると，「イスラームを辞めたい」と漏らすようになった。スリも「イスラームを辞めたい」と言い始めるようになった。彼らにとって，イスラームへの改宗とは，現金獲得の手段なのである。

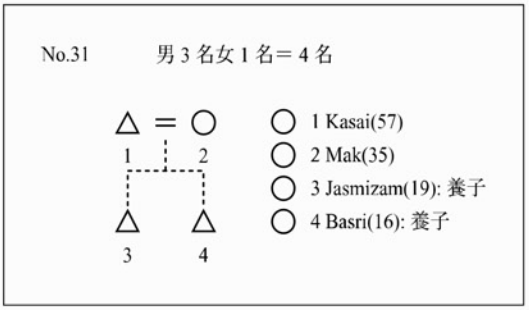
ドリアン収穫は，スィウ夫婦がイスラームへ改宗して，ドリアン果樹園の収穫権をスラッから剥奪されたので，スィウのイスラームへ改宗していない娘たちが代わりに収穫作業を行なっていた。

スィウとスリは，これまで何度も「離婚・再婚」を繰り返していた。2002 年に再訪したときには，「離婚」していたが，2003 年には「再婚」していた。

## 6.4　バダッの親族群

No. 31 から No. 33 はバティン・ボンスと第 2 妻との間の息子バダッ（Badak）の親

族群である。バティン・ボンスの第1妻の子供たちは，ムントゥリ・レワットやバティン・ジャングットの母である。バティン・ボンスは姉である第1妻の死後，妹と結婚したのである。バダッは称号保有者候補であったが，能力がなく，称号を継承することができなかった。息子ロンゴッは狩猟の腕前が一流である一方，ゴム採液作業を嫌がる傾向が強い。この親族群の人びとの多くは，貧困化し，キリスト教に改宗している。

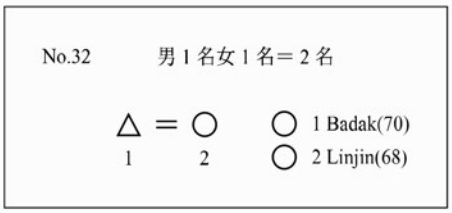



No. 31

カサイ（Kasai）はパハン州出身で，結婚時にPanglima Datangの称号を与えられた。この家族は，ゴム園を所有しているにもかかわらず，ゴム採液作業の仕事をしていなかった。ゴム園は「賃貸」している。世帯調査当時，華人による日雇い労働や村の外での賃金労働を行なっていた。そして，ラタン採取などの森林産物採取の仕事に従事していた。ゴム採液作業をしないこうした家族の場合にも，ドリアン収穫はしていた。

世帯調査当時，カサイは夢でキリスト教へ改宗するようにお告げを受けたと話していたが，実際には3年以上も前からキリスト教へ改宗していた。このことを公言するようになったのは，1998年3月のことである。妻マッ（Mak）の弟ウカイ（Ukai）は，すでにキリスト教へ改宗しており，ブラナンでキリスト教宣教活動を行なっていた。ウカイに勧誘されて改宗したのである。

カサイ夫婦に子供はできず，No. 37のポラン（Polan）の妻サリ（Sari）の弟にあたるジャスミザム（Jasmizam）やウカイの息子バスリ（Basri）を養子にしている。彼らも両親と同様に，ゴム採液作業はせず，日雇い労働や森林産物採取の仕事をしていた。

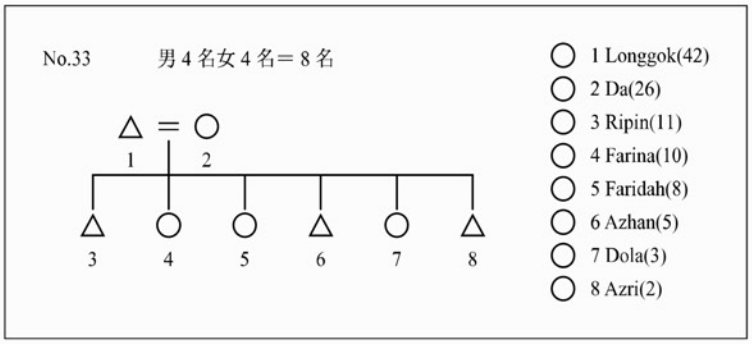



No. 32

バダッ（Badak）はバティン・ボンス（Batin Bongsu）の息子で，バティン・ジャングットらと同一の母系出自集団の成員である。本来ならば何らかの称号を保有しているはずの人物であるが，その才覚がなかった。ゴム採液作業はせず，ゴム園を「賃貸」している。彼自身は日雇い労働をときどき行なっていた。子供たちの家の裏に簡素な小屋を建てて住んでいる。世帯調査当時には「無宗教」としていたが，娘マッと同様にキリスト教に改宗していることが後に判明した。キリスト教改宗を公言してからは息子ウカイのもとで生活することが多くなった。

バダッの最初の妻トゥワ（Tuwa）はアキ・マインの妻の妹であり，No. 56 のルンブット（Lumbut）の母である。彼らの間には子供ができなかった。ルンブットはトゥワの連れ子である。2 番目の妻リンジン（Linjin）の間には子供が 3 人いる。

バダッ夫婦や娘マッ夫婦のキリスト教への改宗は，困窮生活のためと考えられている。




No. 33

ロンゴッ（Longgok）はバダッの息子である。妻ダ（Da）はアイル村出身である。両親やキョウダイがキリスト教に改宗しているにもかかわらず，彼の家族だけはキリスト教に改宗しなかった。彼もまたゴム園を「賃貸」して，日雇い労働や森林産物採取の仕事に従事していた。彼のように，困窮生活のため，借金が増え，その返済のた

めにゴム園を「賃貸」するという人は意外に多い。つまり，「賃貸」には 2 種類あり，ゴム園が余っていてゴム採液作業の人手がいなくて貸す「賃貸」と借金の担保としての「賃貸」があるのである。借金の担保としての「賃貸」の場合，重要な現金収入源を失うことになり，困窮生活に拍車をかける結果となる。

ロンゴッは，森で生活するための技術には長けており，バティン・ボンスやバティン・スグモッの末裔らしく，「森の民」の時代ならばリーダーになれた男である。しかし，事務能力や外部との交渉能力などを必要とする現在のリーダー像とは一致しない。

## 6.5　ムントゥリ・グムッの親族群

No. 34 から No. 38 は，バティン・ボンスの娘ウバット（Ubat）の子孫の親族群である。No. 13 から No. 25 と共に，ピンダーを祖とする母系出自集団の一翼を形成している。したがって，ムントゥリやジェクラーの称号保有者がいて，彼らがこの親族群のリーダーとなっている。しかし，ティモ（Timo）はキリスト教へ改宗して村を出ていき，バンコンの妻ビルはイスラームへ改宗するなど，宗教問題を抱えているグループである。

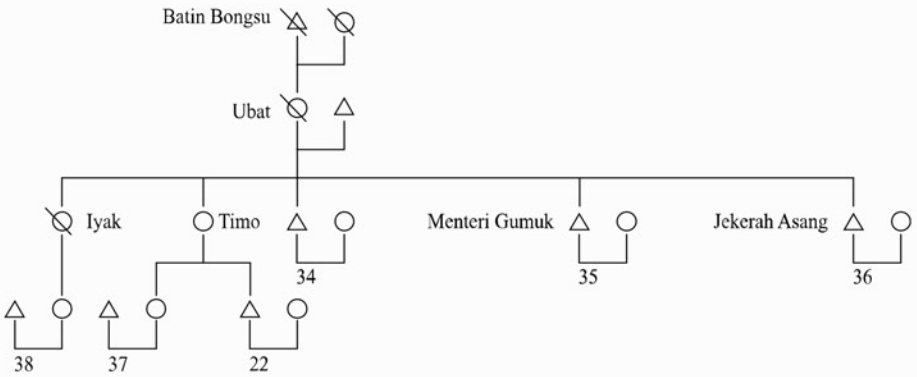
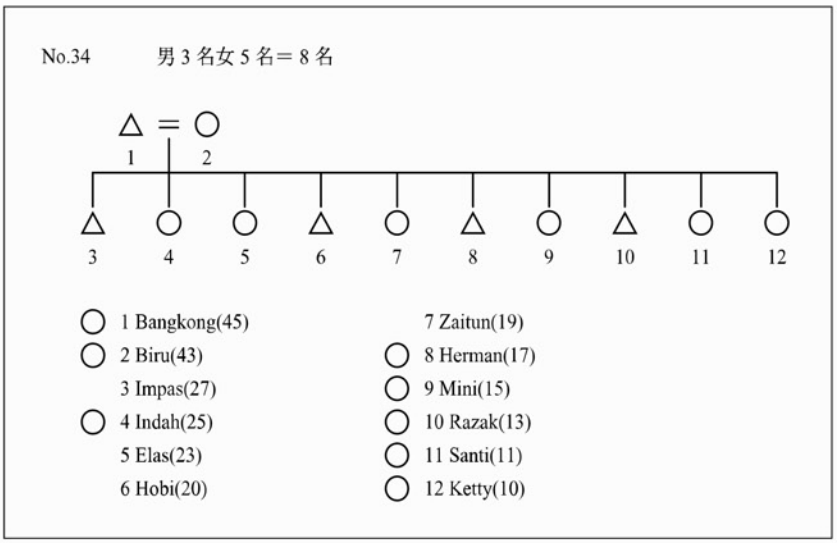



**図 13**　No. 34 から No. 38

No. 34

バンコン（Bangkong）は Panglima Muda の称号保有者である。バダッと同様に，本来ならば何らかの高位のアダット・リーダーの称号を継承する立場にあるが，そうなれなかったのは，継承するための個人的資質に欠けていたためである。ゴム園を比較的多く所有しているが，それらを「賃貸」していたりして十分に活用していない。

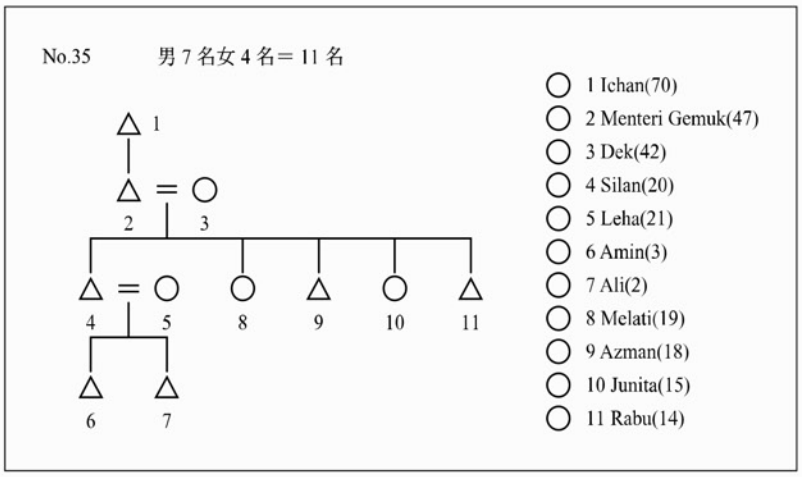



ビル（Biru）はイスラーム改宗の決意をして，そのことが原因でバンコンと離婚した。しかしその後，バンコンと暮らすようになった。このことについては，拙稿（信田 1999a）を参照。ビルは No. 9 のマンク・ハシムの母系出自集団出身であり，息子ヤンを No. 12 に養子に出している。しかし，彼女のイスラーム改宗を契機として，この母系出自集団とのつきあいは途絶えた。

息子インパス（Impas）はアカイ村に婚出したが，ゴム採液作業の仕事をドリアン・タワール村で行ない，生計をたてていた。息子のホビ（Hobi）はマラカ州のブキット・パヨン村に婚出した。バンコンのキョウダイとブキット・パヨン村の間には，いくつかの姻族関係が見られる。娘たちはそれぞれ，パハン州やヌグリ・スンビラン州のルンバウ（Rembau）に婚出した。「その後」，娘インダー（Indah）はサバ州出身のカダザン男性と結婚した。

No. 35

ムントゥリ・グムッ（Menteri Gemuk）はバンコンの実弟である。Menteri の称号を保有している。これまで Panglima Tunggal や Jekerah などの称号を保有してきた。妻デッ（Dek）は同じジェルブ（Jelebu）のクラカ村（Kg. Kelaka）の出身である。バンコンの妻ビルの弟は同村のバティンである。また，ムントゥリ・グムッの姉の娘夫婦もまた同村に住んでいる。ムントゥリ・グムッとクラカ村の間には，ジェナン・ミサイとドゥスン・クブール村のような関係がある。



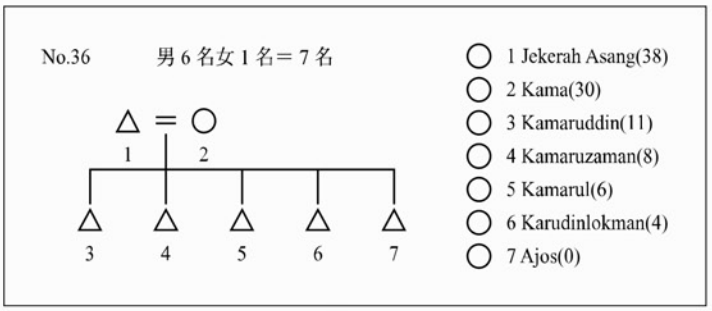

世帯調査当時，息子スィラン（Silan）は隣村のギラン村（Kg. Gelang）のマレー人女性をレイプした罪によって，6年間刑務所に入っていた。妻レハ（Leha）や子供がいる彼がなぜマレー人の娘をレイプしたのか，村の人びとは首を傾げていた。スィランは酒飲みであった。レハはブキット・パヨン村出身で，夫の出所をこの家で待っていた。出所したスィランは，「その後」，マレー人を殴打し，ふたたび刑務所に入った。そして，出所後，クラカ村に移住した。

息子スマン（Seman）は祖父イチャン（Ichan）のゴム園で採液作業をしていた。「その後」，ロンゴッの娘（No. 33）と結婚した。イチャンは娘ティモ（キリスト教改宗者）のいるスランゴール州のブロガ（Beroga）で過ごすこともあった。

ムントゥリ・グムッはバティン・ジャングットの忠告に従い，ゴム採液作業の仕事に従事する。彼らキョウダイのなかではただ1人バティン・ジャングットの忠告に従う人物である。しかし，ムントゥリの称号を継承するにあたってバティン・ジャングットから与えられたドゥスン・イラム（Dusun Ilam）というプサカ（*pusaka*：継承財）のドリアン果樹園を維持できなかった。これは，このキョウダイ特有の「せっかくの財をうまく活用できない」という性質を示している。ドゥスン・イラムは，「その後」，ゲンレー（No. 20）が管理を引き継ぐことになった。

バティン・ジャングットはこのキョウダイを指して，政治的リーダーシップや体力はあるが，経済力がないと評していた。農作業や森の生活を行なう上での個人的能力には優れているのだが，それを経済と結びつける能力が欠けているのである。困窮生活はしていないが，多くの財を保有しているにもかかわらず，バティン・ジャングットやジェナン・ミサイ，マンク・ハシムのように富を蓄積できないのは，このあたり

の農業経営能力に原因があるのかもしれない。

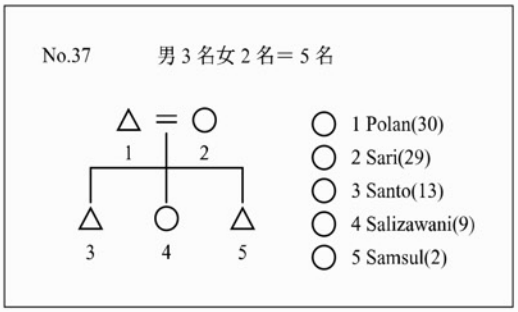



No. 36

ジェクラー・アサン（Jekerah Asang）は，ムントゥリ・グムッの実弟である。ムントゥリ・レワットの死にともなって空位となったムントゥリの称号をめぐる人選が，バティン・ジャングットを中心に行なわれた。ムントゥリ・グムッ（当時はジェクラーであった）をムントゥリに昇格させることはすぐに決まったが，ジェクラーの継承者をめぐって議論があった。候補者の 3 人は，バンコン，ジェクラー・アサン，バニン村に住むボン（Bong）のキョウダイであった。そのうち，バンコンは妻のイスラーム改宗や妻との離婚をめぐるトラブルで候補者からはずされた。ボンはバニン村に婚出しており，愛想がなく評判のよくない彼の妻がドリアン・タワール村に移住することにワリスの女性たちの間で抵抗があった。消去法でジェクラー・アサンが残ったが，ジェクラー・アサンにはほとんど経済力がなく，「コンデンス・ミルクでさえも，もらいに来た」とマニョ（No. 19）が難色を示していた。しかし，結局，こうした経済力は本人の今後の力量に任せるということで，ジェクラー・アサンが継承することになった。

ジェクラー・アサンはバニン村に婚出していたが，妻子を伴って帰ってきていた。妻カマ（Kama）はバニン村出身である。キリスト教に改宗して村を出ていった姉ティモの家に住んでいる。

ジェクラー・アサンは，ゴム園を「賃貸」してその収入で生計を立てている。それは困窮が原因であるとは言えない。むしろ，ティカッの「賃貸」のやり方を模倣したのである。ジェクラー・アサンはティカッ派であり，ティカッの「仕事」を手伝っていた。ティカッのコミッションのおこぼれと，「賃貸」からの収入などでかろうじて生計をたてていた。こうした生業の仕方は，バティン・ジャングットが推奨する仕方とはほど遠いものである。

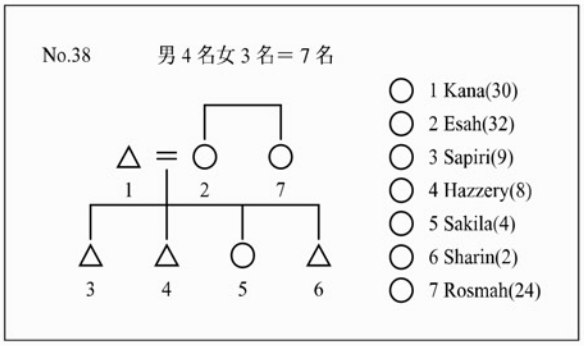



No. 37

ポラン（Polan）はオタ（No. 1）の実弟である。ポランの兄スリ（Seli）はキリスト教へ改宗したことが原因で，ドリアン・タワール村を出てシンパン・プルタン村に移住した。スリの妻はポランの妻サリ（Sari）の姉である。つまり，兄弟と姉妹が結婚していることになる。スリ夫婦のゴム園はポラン夫婦が継承している。ポランはティカッ派である。

サリの両親はキリスト教へ改宗し，母親ティモ（Timo）（ムントゥリ・グムッらの姉）は父親クドッ（Kudok）の出身村に移住した。サリとキリスト教へ改宗した家族の間には，つきあいがない。

このように，キリスト教改宗というのも，イスラーム改宗と同様に，彼らの村の権力関係や親族関係に重大な影響を与えている。公には，キリスト教徒，ムスリム，無宗教者の間には，儀礼などの親族を基盤とした関係が途絶えている。村内が分裂していたり，キリスト教の村と無宗教の村では没交渉であったりする。




No. 38

カナ（Kana）はポテー（No. 26）の息子であり，妻エサー（Esah）はムントゥリ・グムッらの姉イヤッ（Iyax）の娘である。妻エサーのキョウダイには，No. 21 のコン

チョン，No. 42 のアリフ，No. 45 のクダイの妻マラ（Mara）がいる。

カナはティカッ派であり，ティカッにならって，ゴム園の一部を「賃貸」している。世帯調査当時には，時々，日雇い労働に出ていた。ゴム採液作業はもっぱら妻エサーの仕事であった。「その後」，ティカッが UMNO の支部長を辞めた後，支部長に就任した。

妻エサーの異父妹ロスマー（Rosmah）が同居していた。彼女はジョホール州のバトゥ・パハット（Batu Pahat）の工場で働いていた。彼女の父は華人である。母イヤッと華人男性との間にできた子供である。「その後」，マレー人と結婚して，イスラームへ改宗した。自ら置かれた境遇に負けることなく凛として生きる彼女の生き方に，村の女性たちは同情的であった。通常のイスラーム改宗者とは異なり，イスラームへ改宗した後も村の人びととの親しい関係を維持していた。

エサーとサリ（No. 37）やその妹ノルマー（No. 22）はドゥスン・トゥトゥー（Dusun Tutuh）の継承者である。ノルマーはアルとの離婚後，その権利を失った。ドゥスン・トゥトゥーでのドリアンの収穫権は彼女らが所有している。

## 6.6　ジェクラー・ポヤンの子孫の親族群

No. 39 から No. 42 は，追放されたジェクラー・ポヤンの妻とその妹の子孫たちである。彼らはバティン・ジャングットに頼んで，ドリアン・タワール村に移住してきた。最後に述べるアキ・マイン派の人びとは，彼らと近い親族関係にある人びとである。

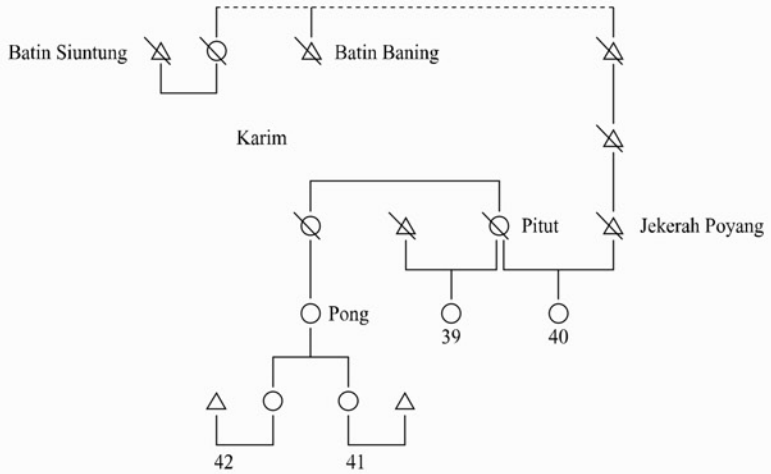
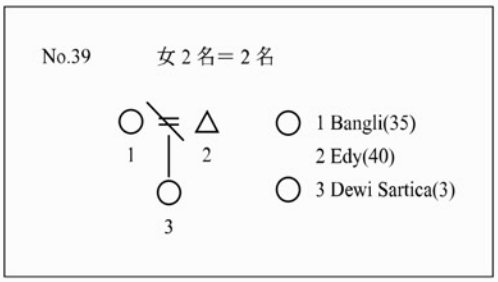



**図 14**　No. 39 から No. 42




No. 39

バンリ（Bangli）の夫エディ（Edy）はインドネシア人（ジャワ人）の出稼ぎ労働者であった。1991年に結婚し，1997年4月に離婚した。エディがバンリと結婚する際には，エディが村のアダットに従うということで村の人びとと良好な関係を築いていたが，その後，彼自身がムスリムということもあり関係が悪化し，離婚と同時にエディは村を出ていった。

バンリの母は，ピトゥット（Pitut）でアキ・マインとキョウダイである。シンパン・プルタン村に住んでいたが，バティン・ジャングットに頼んで，ドリアン・タワール村に住むようになった。バンリの父はインド人であり，彼女の名前もバングラデシュに由来する。

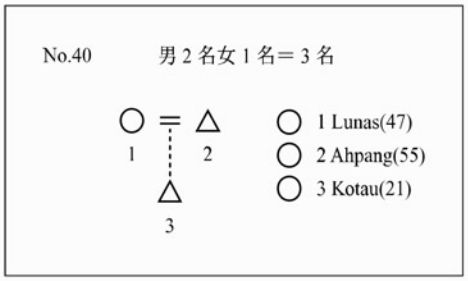
ルナス（Lunas）（No. 40）とは，異父姉妹である。彼女たち姉妹は，バティン・ジャングットから与えられたゴム園やドリアン果樹園などを大事にしており，「賃貸」などは行なっていなかった。

ゴム採液作業以外にも，バナナを売ったり，お菓子を作ってプルタンや村の人びとに売ったりするなど，小銭稼ぎが好きな女性である。こうした商売根性はインド人である父親ゆずりだとしばしば噂されていた。

2002年8月，デング出血熱によって娘が亡くなった。父親であるエディが葬式に来て，大泣きした。エディは近隣のマレー人女性と再婚していた。しばらくして，バンリはオラン・アスリ男性と再婚した。

No. 40

ルナス（Lunas）の父親ポヤン（Poyang）はかつてジェクラーの称号を保有していた。しかし，ポヤンは当時のバティン・ドゥラマンと争い，村を出ていった（Baharon 1973）。ポヤンが亡くなった後，未亡人であるピトゥットはバティン・ジャングットに懇願し，ドリアン・タワール村に住むようになった。ルナスとバンリのゴム園やド

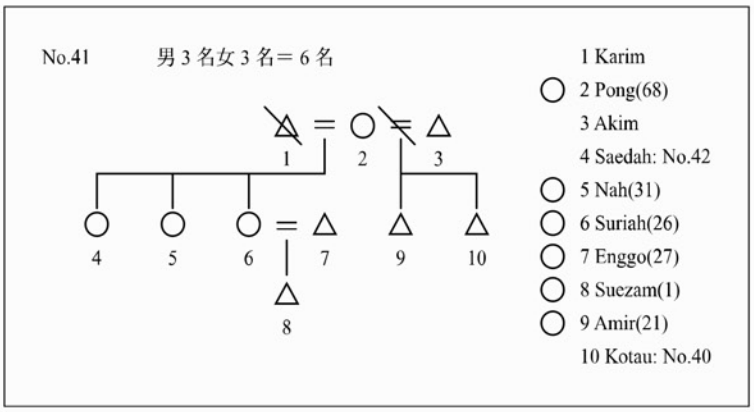



リアン果樹園は，バティン・ジャングットの所有地の一部を譲り受けたものである。

ルナスは長らく独身であったが，1997 年 4 月にスレンバンの華人と結婚した。適齢期を過ぎたオラン・アスリ女性がしばしば老齢に達している華人男性と再婚するということの一例である。独身で子供がいないと思ったからであろうか，母親の姉妹の娘であるポン（Pong）（No. 41）の子供を養子として育てていた。しかし，彼コタウ（Kotau）はしばしば「狂気の状態（*gila*）」になっていた。この「病い」のために，婚約直前で相手から婚約を破棄されたことがある。

1995 年頃に，村びとの何人かが，集団ヒステリー（*gila*）になったことがある。このような状態になったのは，男性はコタウだけで，女性はクダイ（No. 45）の妻と娘，アジョイ（No. 28）の娘，アドゥナン（No. 46）の娘であった。また，精霊が体のなかに入り（*hantu masuk; tegor*），何もかも忘れてしまう病気（*rupa*）になった経験のある人はウカル夫婦（No. 19），バチェ（No. 12），アジャム（Ajam）（No. 43），ロドー（Lodoh）（No. 60），チャマイ（Camai）（No. 44），エジャ（Eja）（No. 62），ユウ（Yu）（No. 16）などで，男性や女性が入り交じっている。

かつてムントゥリ・グムッとの結婚話があったが，ルナスから断ったと言われている。「あのとき断らなければこんなことにならなかったのに」というのが最近のジェナン・ミサイのルナスについての話である。夫である華人男性は相続をめぐる争いに巻き込まれ，娘をレイプした罪で刑務所に入ることになった。「その後」，コタウはキリスト教へ改宗し，正気を失った状態のなかで，農薬を飲んで死んでしまった。そして，妹バンリとの仲が悪化して，絶縁状態となった。ムントゥリ・グムッと結婚していれば，こんな不幸な目にあうことはなかったというのが，ジェナン・ミサイの主張なのである。




No. 41

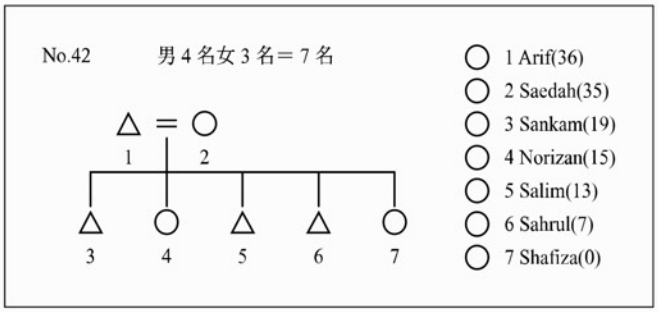
ポン（Pong）はルナス（No. 40）とイトコどうしである。母親どうしがキョウダイである。双子の息子の 1 人コタウをルナスの養子にした。ポンはカリム（Karim）というスムライ（Semelai）の男性と結婚していた。一時，アキム（Akim）という男性と一カ月間過ごしたことがあり，コタウとアミール（Amir）はアキムとの間にできた子供である。彼らがドリアン・タワール村に移住してきたのは，ルナスの母ピトゥットについてきたからである。娘サエダー（Saedah）はアリフ（No. 42）の妻である。

娘ナー（Nah）は未婚であり，世帯調査当時は，ゴム採液作業の仕事をしていた。ゴムをアマンのゴム仲買店まで運搬するのは，弟アミールの仕事であった。「その後」，グンティン・ハイランドにあるホテルのレストランの皿洗いとして，ハジター（No. 19）と共に働きに出た。「その後」，ナーはミロン（No. 13）と結婚した。ミロンはこの家に住むようになった。

ナーの妹スリアー（Suriah）は結婚していて，夫エンゴ（Enggo）はスランゴール州のパンスーン村（Kg. Pansoon）の出身である。バティン・ジャングットの娘スハイナ（No. 14）の夫も同村出身であり，彼らの結婚式にはエンゴも出席していた。

No. 42

アリフ（Arif）はコンチョン（No. 21）やエサー（No. 38）とキョウダイである。コンチョンは「間違った結婚」を理由に称号の継承権を失ったが，アリフは Panglima Perang の称号を継承した。隣家のクダイ（No. 45）の妻マラは彼らの姉である。兄ジャハリ（Jahari）はドゥスン・クブール村に婚出していた。




アリフはいわゆるティカッ派であるが，ほとんどのティカッ派と同様に，積極的にティカッに与しているわけではない。しかし，世帯調査当時は，ティカッと同様にゴム園を「賃貸」し，自らは狩猟や森林産物の採取の仕事をしていた。森での生活技術に長けているアリフだが，外部との交渉能力はない。

サエダー（Saedah）はポン（No. 41）の娘である。息子サンカム（Sankam）はアマンのゴム仲買店で働いていた。しかし，「その後」，サンカムはイスラームへ改宗し，アンコット（No. 50）と結婚した。イスラーム改宗者となったサンカムは，村の人びととの交流がなくなってしまった。

サンカムの弟サリム（Salim）は，バニン村の寄宿舎に寝泊まりして小学校に通っていた。プルタン（Pertang）の中学校に入学したが，すぐに学校に行かなくなった。「その後」，サリムはブキット・パヨン村の女性と結婚した。そして，ミロンの結婚式では，酔っ払ってトラックを動かし，電柱にぶつかる事故を起こした。

## 6.7　アリの子孫の親族群

No. 43 から No. 55 は，アリ派の人びとである。アリの子供はそれぞれバティンとジェナンの称号を継承したので，ドリアン・タワール村に留まることになった。そして，アリ派の子孫もまたドリアン・タワール村に住んでいる。アリがマレー人の父を持っていたり，ジェナン・キチョイがマレー人女性と結婚していたり，といったようにマレー人との関係が見られる。イスラームへ改宗する人びとが多い。いわゆる「下の人びと」の中核である。

No. 43

アジャム（Ajam）はクダイ（No. 45），カトゥップ（No. 44），ハジ・コニン（No. 52），エンタッ（No. 53），ウレッ（No. 10）らとキョウダイである。「狂人（*orang*

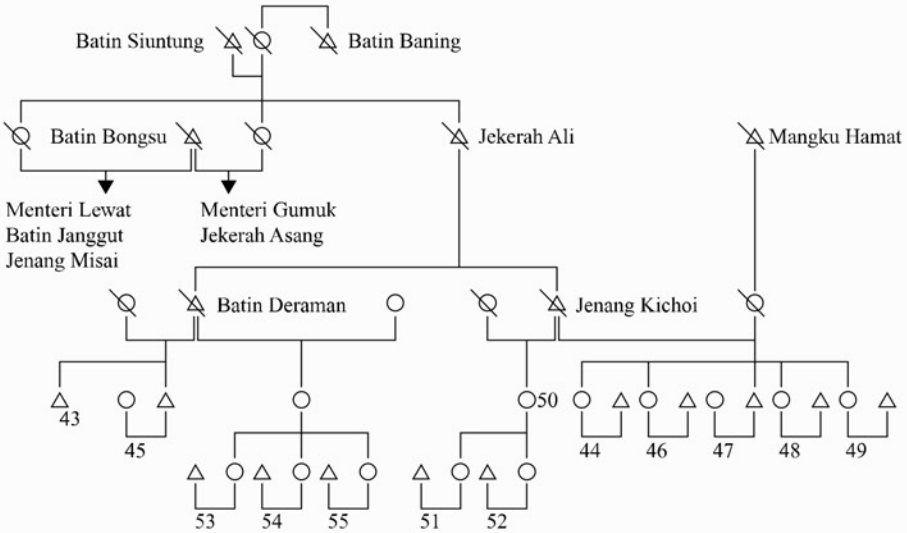
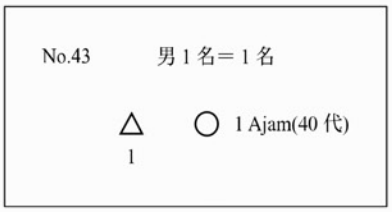



**図 15**　No. 43 から No. 55




*gila*)」と言われている人で，左手の成長が止まっている病気（*cacak*）である。

世帯調査当時は，クダイが生活の面倒を見ていた。新しい小屋をバンコン（No. 34）の家屋の北側につくって住んでいた。生活に困窮すると，親族らが米やお金を与えていた。時々（満月に近いとき），真夜中に村のなかを徘徊した。本人いわく，「オバケが襲ってくるから逃げているのだ」。

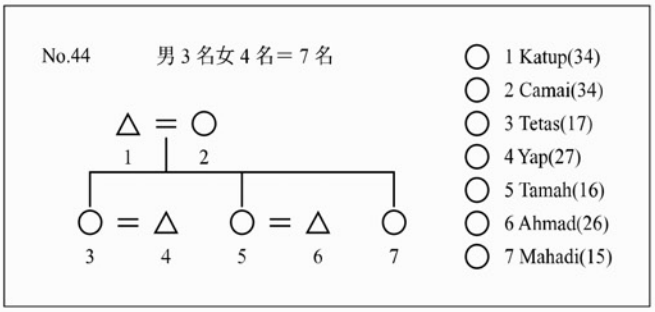
アマン（No. 9）が彼に草取りなどの「仕事」を与えて，働かせていたこともあった。面倒を見てくれる姉がいるというシンパン・プルタン村まで，約 10 キロメートルの道をしばしば歩いて出かけていた。

かつて，ドリアンの収穫時期に，祖父ジェクラー・アリがアジャムに与えたドリアン果樹園のドリアンを彼は仲買人に売却し，バスを乗り継いでクアラ・ルンプールまで出かけ，現金を使い果たし憔悴しているところを警察に保護されたことがある。クダイらは心配して探したが見つからず，クアラ・ルンプールのオラン・アスリ局から連絡を受けてはじめて所在が分かった。それ以来，アジャムには大金を持たせないよ

うにとクダイが現金の管理をするようになった。といっても，アジャムの収入は，せいぜいドリアン収穫の収入だけなのだが。

アジャムと耳が聞こえないボロッ（Bolok）（No. 27）が 2 人で森に入り，行方不明になったことがある。アジャムは人声がすると逃げ，ボロッは呼びかけが聞こえなかった。水を飲んでしのいだのか，見つかった時は 2 人とも目を真っ赤にして憔悴しきっていた。

アジャムの話を理解できるのは，アマンやクダイなどに限られていた。村の人びとでも，頻繁に接していないとアジャムが何を話しているのか理解できなかった。それでも，精神病院に入院するようなこともなく，村で生活していた。

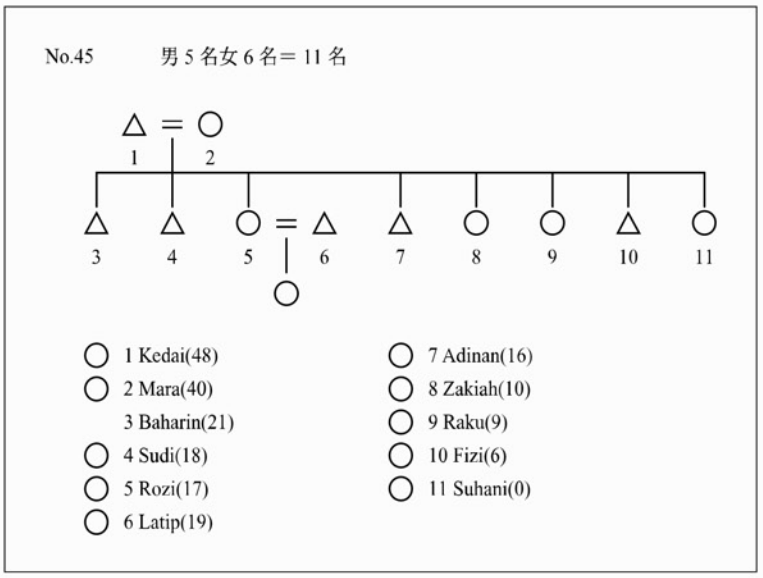



No. 44

カトゥップ（Katup）はクダイ（No. 45）らとキョウダイである。妻チャマイ（Camai）はブジャン（Bujang）らとキョウダイである。カトゥップの父バティン・ドゥラマンとチャマイの父ジェナン・キチョイはキョウダイである。したがって，彼らの結婚は，いわゆる父方平行イトコ婚であった。

カトゥップはゴム採液作業をせず，プタイなどの森林産物採取の仕事をしていた。ウレッ（No. 10）と共に行動することが多かった。酒飲みである。一方，チャマイは「軽度の精神病（*sewel*）」と言われていて，家にいるよりもドリアン果樹園につくった小屋に住んでいることの方が多かった。娘トゥタス（Tetas）はポテー（No. 26）の息子ヤップ（Yap）と結婚しており，家計の中心は彼らに移行していた。「その後」，彼らはキリスト教へ改宗した。

娘タマー（Tamah）はブキット・ランジャン村の男性と結婚し婚出していたが，夫アフマッド（Ahmad）と共に村に帰ってきた。ブキット・ランジャン村では生活するのが難しかったらしい。




No. 45

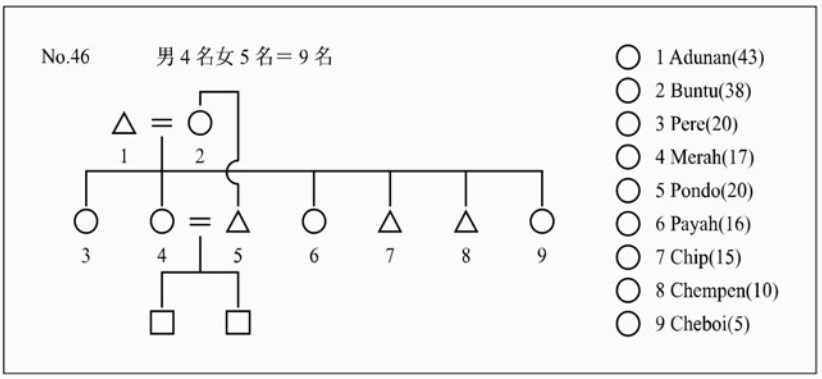
クダイ（Kedai）はバティン・ドゥラマンの息子で，Panglima Helang Panasの称号保有者である。「上の人びと」に従っている。ウレッ（No. 10），カトゥップ（No. 44），アジャム（No. 43）とは同母同父キョウダイ，エンタッ（No. 53）やハジ・コニン（No. 52）とは異母同父キョウダイである。バティン・ドゥラマンには4人の妻がいたのである。

妻はアリフ（No. 42）らの姉マラである。彼女は「狂人（*orang gila*）」と言われている。息子アディナン（Adinan）は「唖者（*bisu*）」で，精神を病んでいた。また娘ロズィ（Rozi）も「狂気の状態（*gila*）」になった経験がある。

ロズィの夫ラティップ（Latip）はスムライ（Semelai）である。両親はイスラームへ改宗した。彼自身は改宗しなかった。長期調査期間の後半，彼ら夫婦はコンチョン（No. 21）の家の裏に新居を建設した。水はコンチョンの家から借りている粗末な家であった。「その後」，PPRTによる家屋提供を受けた。ロズィとラティップ夫婦のように，子供が生まれるころになると，娘夫婦あるいは息子夫婦は親夫婦との同居をやめて，新居を構えることが多い。ラティップはクダイのゴム園やアマン（No. 9）のゴム園の採液作業をすることによって，家計を補っていた。

バハリン（Baharin）は婚出していた。「その後」，スディ（Sudi）はクアラ・ルンプールへ出稼ぎに行くようになった。「外の仕事」も経験して何でもできるような男になりたいと彼は語っていた。ザキアー（Zakiah）は成績が優秀で大学などへ進学できる

ほどの学力があるのだが，「ザキアーと一緒に寝ないと眠れない」と母親が手放さない。



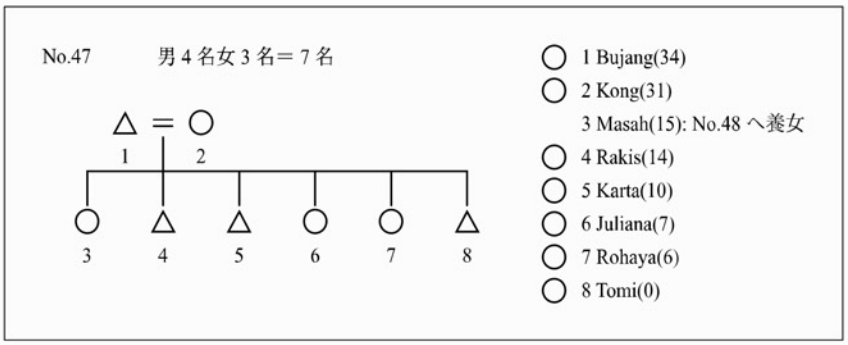

No. 46

アドゥナン（Adunan）はバンコン（No. 34），ムントゥリ・グムッ（No. 35），ジェクラー・アサン（No. 36）らのキョウダイである。1994 年にイスラームへ改宗した。ティカッ派である。ブントゥ（Buntu）はブジャンらとキョウダイで，父親はジェナン・キチョイである。娘ペレ（Pere）はニライ（Nilai）近郊のスンガイ・マハン村（Kg. Sungai Mahang）の男性と結婚しようとしたのだが，ペレの方は男性に妻がいることを知らず，男性の方は彼女がイスラームに改宗していることを知らなかった。1996 年 12 月に結婚式をアドゥナンがジェナン・ミサイにアダット会館で行ないたいと申し込んできたようであるが，イスラーム式の結婚式はできないとしてジェナン・ミサイは断った。娘メラー（Merah）は母ブントゥの弟ポンド（Pondo）と「結婚」し子供が 2 人いた。この「結婚」については拙稿（信田 1999b; 2002）を参照。

ゴム採液作業の仕事をしていたが，ニワトリ小屋のプロジェクトを受けるようになってから，ゴム園を「賃貸」し，ラタンなどの森林産物採取の仕事をするようになった。末娘を華人幼稚園に通わせていた。イスラーム改宗後も兄バンコン（No. 34）とのつきあいが続いていて，バンコンの妻はイスラームへ改宗した。

No. 47

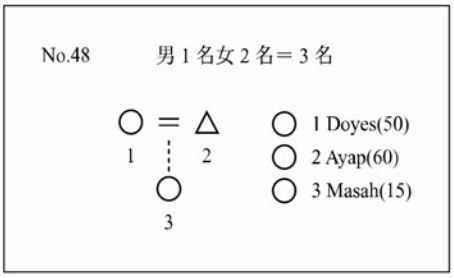
ブジャン（Bujang）はジェナン・キチョイの息子であり，キョウダイがチャマイ（No. 44），ブントゥ（No. 46），ポンド（No. 46），ドイエス（Doyes）（No. 47），ハパム（Hapam）（No. 49）である。その他のキョウダイはドゥスン・クブール村に住ん




でおり，いずれもイスラームへ改宗した。

ブジャンはドイェスやハパムと共に，「上の人びと」に従っている。しかし，ゴム採液作業は行なわず，プタイなどの森林産物採取の仕事をしていた。父ジェナン・キチョイが遺したシアラン地域のドリアン果樹園は，ブジャンやドイェス（No. 48），テコッ（Tekok）（No. 50）（彼女はブジャンらのキョウダイとは異母同父キョウダイである）が継承していた。

ブジャンは耳が遠いし，視力が弱い。妻コン（Kong）はパハン州出身である。しばしばコンの弟（酒飲み）が訪れていた。長女マサー（Masah）はドイェスの養女になっていた。




No. 48

ドイェス（Doyes）はジェナン・キチョイの娘でブジャン（No. 47）らとキョウダイである。長らく未婚であり，ブジャンの娘マサーを養女としていた。しかし，夫アヤップ（Ayap：本名ではない）と結婚した。アヤップはスレンバン出身の華人で，森林伐採業などのさまざまな事業をこのあたりの地域で行なっていた。世帯調査当時は，油ヤシ・プランテーションの請負業者であった。ルナス（No. 40）と同様に，老齢の華人男性と適齢期を過ぎたオラン・アスリ女性の結婚の一例である。